

〈序論〉

研究動機・研究目的・研究方法

ハンドボールを始めて10年目になるが、戦術に関しては理解に至っていない点が多かった。自分がプレイしてきたフローターのシュートまでの過程は、複雑な要素が絡んでおり、難しく一部しか理解できていない。今後、フローターをプレイヤーとしてやっていく上でも、指導者としてやっていく上でも、しっかりと個人戦術を理解していることはプラスになると考え、シュート運動の個人戦術に関する研究を行うことにした。

研究目的は、フローターの個人戦術であるシュート運動の過程を中心にそれらに関連する動作についての運動構造を明らかにすることを目的とする。

方法としては、運動学における運動モルフォロジー的考察法を用いる(マイネル・K, 1981)。さらに、スポーツの運動経過における8つのカテゴリーのうち、「運動の局面構造」・「運動のリズム」・「運動の先取り」・「運動の正確さ」の4つのカテゴリーを用いて分析していく。その手段としては、映像から様々なプレイを集め、それらを類型化し、典型例として分析・考察を行う。

〈本論〉

第一章 ハンドボール競技の構造特性

個人戦術は、ゲーム状況の分析をした後、状況に見合った行為目標を決定し、状況の効果的な解決をめざした行為プログラムを決定し、それを運動としてうまく実施するためのプレイヤーの措置のことである(シュテラー・G, 1993)。

個人的戦術行為は数多くの前提と原理によって規定されている。1つは、正確な状況知覚と状況予見によって左右されること。2つ目は、状況によって個人が実行すべき戦術についての知識と体系とが結びついていることである。ポジションに応じた課題を実現しなければならないのと同様、集団の戦術目標にしたがわなければならない。個人的戦術行為の効力は、プレイヤーの生まれながらの体格と心理特性によって少なからず影響される。

第二章 ゲームの運動観察

ゲームの運動観察には、運動モルフォロジー的考察法を用いる。この考察法には、自分自身の運動の自己知覚にもとづく「自己観察」と他者の知覚にもとづく「他者観察」の2種類がある。本研究では、「自己観察」と「他者観察」の「印象分析」を行い、その結果を考察する。結果を考察する際には、マイネルの諸カテゴリーを用いる。方法としては、日本ハンドボール協会から提供を受けた「1997 熊本世界選手権大会」男子スウェーデンチーム全試合のビデオの中からオルソン・ステファン選手(Olsson Staffan)のシュートに関するプレイを観察し、それらの分析を行うものとする。

第三章 研究対象の運動観察

今回研究において、4つの事例をもとにシュート運動の運動構造の観察を行った。この4つの事例はスウェーデン代表全8試合のビデオからオルソン選手のシュートシーンを抽出し、類型化を行い、その中から典型例として選んだ4事例である。事例1はステップシュート、事例2は走り込みからのジャンプシュート、事例3はフェイントからのジャンプシュート、事例4はクロスからのジャンプシュートである。これらの映像を観察し、分析・考察を行った。

その結果、シュート運動に関する動きの特徴として次の5つが挙げられた。

- ①先取り能力が優れていること。味方の動きに合わせる動きばかりでなく、自分が攻めるときのDFの動きも先取りし、DFをかわす動きがみられた。
- ②リズムの変化の利用。“ゆっくり”から“速い”動きの変化に加え、アウトからイン、インからアウトの方向の変化があった。この組み合わせによってDFをかわしていることが多かった。
- ③シュートまでの動きがすばやいこと。ボールを受け取ったあと2歩で踏み切りまで至り、踏み切りとほぼ同時にシュート体勢が準備されている。
- ④シュート技術。敵のブロックや身体を逆に利用し、ブラインド状態からキーパーに見えない位置からシュートを打っている。
- ⑤個人のみで力突破しようとする場面がほとんどないこと。高度な能力を持っていれば個人の力で容易に突破しシュートまで到達することができるはずであるが、そのような場面はほとんど見られず、逆に、集団戦術の展開のなかで得点を挙げる場合が多くみられた。この5つの特徴が相互に作用し、シュートが成功していたと考えられた。

〈結論〉

本研究では、ハンドボール競技におけるシュート運動の個人戦術に関する研究を行ってきた。右45°プレイヤーのオルソン・ステファン選手の動きを、運動学の立場に基づきゲーム観察をし、シュートに至るまでの個人の運動経過とそのプレイに関わる他の選手の動きを中心に考察してきた。シュート運動は、ハンドボールにおいて得点を挙げるために欠かせない戦術である。今回研究によって、シュート運動に必要な要素が理解できた。運動の先取り、リズムの変化、すばやい動作、シュート技術などの要素が相互に作用しシュートは成功につながる。

個人戦術はチーム戦術の前提条件となるものであり、個人の戦術は、チームの基盤がもとになり決定されている。個人はチームのなかでの役割を意識し、プレイすることが重要になってくる。プレイはその時・その瞬間によって多くの選択肢に分かれている。そのなかで最良の選択肢を選ぶことは、個人の戦術能力に大きく依存するところがある。これらは、日々のトレーニングによって培われていくものである。

今後は、一つのプレイの本質をどれだけ見抜けるかが大きな課題になってくる。ハンドボール競技を含めた球技では、一つのプレイは一瞬のうちに終わり、同じプレイは二度と起こらない、一回性の現象である。指導者は、この一回しか起こらない現象を、結果のみに捉われず、その運動経過を観察し、運動の本質を見抜くことができなければいけない。その対象は、初心者であろうが熟練したプレイヤーでも同様に行えなければならない。これから、多くの運動を観察し、経験を積むことが重要になると考える。

〈引用・参考文献省略〉